100年先を読む ⑮

無縁社会を打破する創縁社会に商機は存在する

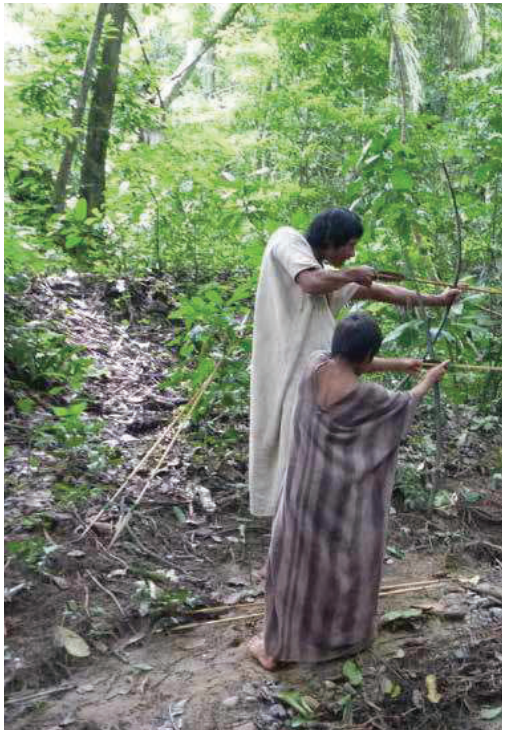
血縁から無縁にまで到達した社会

人間が発見して命名している地球の動物や植物は約200万種とされるが、人間が発見していない生物も多数存在するため、最低でも1000万種以上は生存していると推定されている。それらの多数は生存の確率を向上させるために集団で生活している。現在でこそヒトは食物連鎖の頂点に君臨しているが、初期にはヒトも捕食される立場であり、防御のために集団を形成してきた。しかし、ヒトの場合は時代とともに集団の基盤を変化させてきたという特徴がある。

現代のヒトの最初の祖先は500万年以前に登場したが、その99％以上の期間は狩猟採集で生活してきた。この時代の集団の基盤は「血縁」である。狩猟採集の極意は獲物となる動物や食用となる植物が出現する場所を発見することであるが、他人に察知されれば競合するため場所は極秘情報であった。そこで血縁関係のみで生活し、情報を秘匿（ひとく）していた。アマゾン川源流域に生活する一家を訪問したことがあるが、獲物が出現する場所は親子のみが共有する情報であった。

1万年前に農耕が食料確保の主要な手段になると、集団の基盤は「地縁」に変化した。農業の播種（はしゅ）や収穫は特定の時期に集中するため集団作業が必要になり、同一の場所に定住する人々の結束が社会を形成した。さらに工業が産業の中心になると、多数の人々が住居から工場やオフィスに通勤し、相当の時間を職場の仲間と生活することになり、「職縁」が社会の主要な関係として登場してきた。集合住宅では隣家の様子よりも会社の同僚の事情に精通する社会になっている。

情報社会になった現代に登場してきた関係が「通縁」である。肉声で交信する電話でさえ利用は減少し、電子メールによる文字での交信が飛躍し、見知らぬ間柄でも文字や写真のみでの関係が成立するフェイスブックやツイッターが躍進している。アマゾンの猛威が象徴するように、商品の売買でも人間が介在しない通縁が主流になりつつある。血縁から職縁までは人間が出会う関係であったが、人間の関係が希薄な社会が主流になってきたのである。



ところが、これらさまざまな関係が社会から衰退していく危機を紹介する衝撃のテレビジョン番組が登場した。2010年1月に放送されたＮＨＫスペシャル『無縁社会』である。日本国内で家族とも地域とも連絡のないままに死亡している人々が毎年３万人以上になっているという告発番組である。それ以後も、人口全体の減少、高齢人口の増加、未婚比率の増加、所得格差の拡大などにより、この人数は急速に増加しており、東京都内では10年間で２倍になっている。

無縁社会を打破する創縁社会

アメリカの社会学者デイビット・リースマンが名著『孤独な群衆』を発表したのは半世紀以上前の1950年であるが、社会は「孤独な個人」が大勢になる時代に移行している。この巨大な趨勢（すうせい）を地縁や職縁の時代に逆行させることは困難であり、別途の解決を模索する必要がある。「人の行く裏に道あり花の山」は、多数の人々の関心がある対象ではない分野に投資することが成功するという意味の格言であるが、このような無縁社会の危機を好機と理解する必要がある。

それは「創縁」である。アメリカから導入された日本のコンビニエンス・ストアの店舗は1980年代から20年間は年率10％で増大してきたが、以後の15年間は年率２％の成長でしかなく、客層の主流も若者から老人に転換した。高齢社会には対応できているようであるが、地方都市では店舗までの移動手段もない買物難民が増加している。そこで登場したのがバンを改造した移動店舗である。これは地方都市どころか都会の住宅団地にまで進出し、「創縁」に成功している。

関係人口という概念が注目されている。定住人口が減少する地域を救済する手段は交流人口というのが最近までの常識であった。しかし、観光などで来訪する交流人口は経済効果はあるものの、地域社会の基盤にはならない。そこで定住を期待する移住ではなく、短期に滞在して地域で仕事をしたり住民と交流したりする人口が関係人口である。人手不足の企業の手助けではなく、多数の若者と「創縁」を形成し、血縁から計算すれば第５の社会関係をめざすことになる。

東京大学名誉教授
月尾嘉男（つきおよしお）
Tsukio Yoshio

昭和17（1942）年生まれ。東京大学工学部卒業。工学博士。コンピュータ・グラフィックス、人工知能、仮想現実、メディア政策等を研究。全国各地でカヌーとクロスカントリースキーをしながら私塾を主宰し、地域の有志とともに環境保護や地域計画に取り組む。著書に『幸福実感社会への転進』（モラロジー研究所）、『転換日本』（東京大学出版会）ほか多数。